境界の諸相

―瀬沼夏葉の翻訳文学をめぐって

溝渕園子

一、瀬沼夏葉訳「六号室」が提起する問題

アントーン・パーヴロヴィチ・チェーホフ「六号室」（Антон Павлович Чехов, *Палата № 6*）は、チェーホフの創作活動の中期における代表作の一つである。精神病棟を舞台に物語が展開するこの作品は、医学や医師を扱った小説として扱われることも少なくない。話の大筋は、主人公である医者ラーギンが、患者グローモフとの出会いをきっかけに変化していき、やがて精神病棟の一室に患者として収容され、最期を迎えてしまうというものである。

この小説の日本語訳について、瀬沼夏葉訳「六号室」が世に出たのは、一九〇六（明治三十九）年四月の「文芸界」（第十巻第十号）誌上であった。これより三ヶ月前、馬場孤蝶訳「六号室」が、「芸苑」において連載の形で始まっており、同年六月に完結している。つまり、ほぼ同時期に、異なる翻訳者による「六号室」の日本語訳が現れたということになる。

夏葉訳と孤蝶訳との大きな相違は、依拠する原典が異なる点にある。夏葉訳は原語であるロシア語からの〈直訳〉であるのに対し、孤蝶訳は英語を媒介語とする〈重訳〉であった。実は、この点に関して、同時代評の中に、翻訳者の一人である馬場孤蝶と、「文章世界」の「時評」担当者ＢＭとの間で交わされた興味深いやりとりがある。〔以下、傍線はすべて稿者による。〕

前号の時評に就て、馬場孤蝶氏より「時評子に答ふ」とて左の通り申越された。

「文章世界」第一巻第四号時評中余に関する批難は軽率にはあらずや。夏葉女史の「六号室」は、「文藝界」に現はれたる当時、既にこれを一読せしが、省略の箇所其多きを以て、読者の疑惑を生ぜむを恐れ、「藝苑」第六に於て、拙訳の分には省略無き

旨を断り置きたるなり。故に余は時評子のいへるが如く倨傲にもあらず、又滑稽をやりたるにも非ずと信ず。

ＢＭ「時評」（「文章世界」、明治三十九年七月）

「文芸界」第五巻第四号（明治三十九年四月）掲載の瀬沼夏葉訳[注1]「六号室」は、全十九章を翻訳したものである。「文芸界」当該号の二十頁から七十頁までを占めており、掲載作品及び項の中で、最も多い紙数が割かれている。一方、馬場孤蝶訳「六号室」は、「芸苑」巻第一号（明治三十九年一月）から巻第六号（同年六月）まで連載されている[注2]。つまり、孤蝶訳の連載は、夏葉訳より早く開始され、遅く終了したことになる。そのためか、終了に際して、孤蝶は訳文の末尾に「（全部完結）」と記した上で、「芸苑巻第一より連載し来りて、こゝに完結を告げたる「六号室」は、此者なきチェエホフが作品の省略なき唯一の翻訳なり。編者識」という文言を付け加えている。

これは、明らかに夏葉訳を意識してのことであろう。孤蝶が夏葉訳に多々見られる省略に気付くのは、それを読んだからであり、その上で自分の翻訳こそ唯一の完訳であることを主張したと考えられる[注3]。先に引用したＢＭの皮肉めいた時評は、孤蝶のこの一文を読んで書いたと考えられる。

「省略」なく「全部完結」したことに価値を置く孤蝶に対し、ＢＭは、次に引用するように、もう一つの論点を提出する。

併し僕は馬場氏に対してではなく、我が読者諸君に告げて置きたいことがある。それは僕が茲に夏葉女史のに省略の箇所が多いと云ふ馬場氏の説に同意するのは、英訳のと比較して見れば、二三ヶ所五行十行づつ足らぬ所があると云ふので、露西亜の原文に引き比べて見たのではないと云ふことである。

尤も馬場氏は、「省略の箇所其多きを以て」と、殊に圏点迄つけての弁明であるから、必ずや女史の訳をチェホフの原作と対照されたのであらうと思ふ。さりとは何時露西亜語に堪能にならせられたのか、訝しい限りだ。

第一、馬場氏は英訳から更に重訳されたので、露西亜の原文を御存じなしでの立言とすれば、また一つ滑稽が殖える。…（中略）…厳密に云えば、馬場氏の重訳は、チエホフの翻訳でなくて、英訳（恐くはロングの）の翻訳である。

ＢＭ「時評」（「文章世界」、明治三十九年七月）

ここで重要なのは、英訳に依拠する孤蝶訳が抱える「重訳」の問題性が指摘されている点である。孤蝶訳は「チエホフの翻訳でなく」、「英訳（恐くはロングの）の翻訳」であり、「原文」を知らないのに「省略の箇所が多い」と言明することができるのか、という批判が投げかけられている。これは、省略という、いわば原典の改変の問題より、間接的な翻訳である「重訳」に対する低い評価に根差したものであろう。

それは、つまり、翻訳にあたっての「原文」重視の姿勢ともいえる。

このように、批評者の孤蝶訳に対する非難と、それに対する孤蝶自身の抗弁から、明治三十九年当時、翻訳をめぐる価値基準に二つの視点があったことが確認されよう。一つは、〈重訳〉より〈直訳〉、つまり〈原文〉からの直接的な翻訳を行うことに重きを置く視点である。もう一つは、〈原文〉にあたることより、原作に〈忠実〉であることに価値を置き、省略といった翻訳上の作為は控えるべきとする視点である。

つづけてBMは、同じ「時評」の中で、翻訳に対する自らの価値観を、次のように披露している。

> して見れば、凡そ翻訳は、必ずしも一字一句を残さぬほどに忠実でなくとも、原文の味ひさへ十分に伝へることが出来れば、それでよいのではあるまいか。いかにすとも和げ難き箇所や、強ひて訳して、却つて興趣を害するやうな箇所は、時には捨て去る方が、一層訳者の手柄となることもあらう。何も翻訳と銘打つた以上は、一字一句たりとも省略してはならぬといふ窮屈な約束を設ける必要はないのではあるまいか。

つまり、文学の翻訳では原文の「味ひ」を伝えることが重要であり、それは原文からの、いわゆる直接的な翻訳によってこそ可能になる。これは、「興趣を害」しないことを重んじる規範の下では省略も認められる、という翻訳語としての日本語を重視した翻訳論ということになろう。その場合、翻訳とはどうあるべきかの規範は、原文からの直接的な翻訳という手段によって支えられる。

翻訳史を紐解けば、明治二十年代は、翻訳の分野における文学の特異性が議論され始めた時期であった。それと連動するかのように、文学作品の翻訳のあるべき姿、つまり規範化をめぐって種々の意見が交わされるようになった。そこには、内容把握が第一目的だった明治初期から、明治二十年代以降に翻訳文の吟味へと向かっていく流れがあった。文学作品の翻訳については、文学者の手になるものに価値づけがなされるようになった。この時期、翻訳者が、例えば尾崎紅葉ら作家から文章の指導を受けるケースが見られるようになるのも、そのことと関連づけて考えられよう。

ところで、〈直訳〉の意味が、〈重訳〉に対する、原文からの直接翻訳としての〈直訳〉と、〈意訳〉に対する逐語訳としての〈直訳〉とに分化している状況を鑑み、混乱を避けるため、以下、必要に応じて、原語（原文）については「起点言語」、訳語（訳文）については「目標言語」の語を用いる。[注4] 起点言語とは、たとえば英語から日本語に翻訳する場合であれば、英語を指し、その場合目標言語とは日本語を指す。これに即せば、ロシア文学作品を日本語に翻訳する場合、ロシア語が起点言語であり、日本語は目標言語ということ

になる。起点言語を重視する規範に従えば、翻訳は欧文脈の強い文章になり、目標言語重視の規範に則れば和文脈の強い文章となる。(注5)

ジュール・ヴェルヌやヴィクトル・ユゴー、エドガー・アラン・ポーなどの翻訳で知られ、明治二十年代の「翻訳王」と呼ばれた森田思軒は、「翻訳の心得」と題する文章において、翻訳のあり方に関し、次のように述べている。〔以下、傍線は稿者による。〕

元来翻訳なる者は原文の思想意趣を邦文に言いかへる事にあらすや…（中略）…是は誠に些末の事の様なれとも若し文学の世界より之を眺むるときは其の関係決して少小ならす　外国の文を巧みに邦文に言ひかへて而かも其の意趣を成る可く其儘に伝ゆるは文学世界にて一段の妙技と称すへき者なり…（中略）…今人は大胆なり　マコーレー氏の文も亦翻訳しユーゴー氏の文も亦翻訳す　少しく文学世界の地位を解せるものならんには靦然逡巡之を望て先つ自ら拘泥すへき筈の大家名家の文をも何の遠慮頓着なく平気野面にサッ〳〵と之を翻訳してのけるなりマコーレー氏の文も亦翻訳しユーゴー氏の文も亦翻訳す　而して其の筆力は如何其の心得は如何　嗚呼現時の翻訳の原には有らゆる大胆者をつどへたり　大胆者は最早や是にて十分なり余は追々其の小心者の出てんを願ふ。

（「国民之友」、明治二十年十月）

すなわち、この翻訳論は、「大胆」に「遠慮頓着なく」翻訳するのではなく、「意趣を成る可く其儘に」伝えることに「拘泥」すべきであり、そこにこそ「妙技」と呼べるものがあるという、いわば起点言語重視の姿勢を示している。森田自身の翻訳も、実際、起点言語重視のスタイルであり、翻訳の文章は文語で、弱い欧文脈が見られる、といった傾向が認められる。この時期には、そうした原文に〈忠実〉な「周密文体」の翻訳が登場した。

また、「六号室」の翻訳が世に出る明治三十年代末、二葉亭四迷「余が翻訳の標準」（「成功」、明治三十九年）が発表されている。〔以下、傍線は稿者による。〕

されば、外国文を翻訳する場合に、意味ばかりを考へて、これに重きを置くと原文をこはす虞がある。須らく原文の音調を呑み込んで、それを移すやうにせねばならぬと、かう自分は信じたので、コンマ、ピリオドの一つも濫りに棄てず、原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にも亦ピリオドが一つ、コンマが三つといふ風にして、原文の調子を移さうとした。…（中略）…約言すれば、艶麗の中にどつか寂しい所のあるのが、ツルゲーネフの詩想である。そして、其の当然の結果として、彼の小説には全体に其の気が行き渡つてゐるのだから、これを翻訳するには其の心持を失はないやうに、常に其の人になつて

書いて行かぬと、往々にして文調にそぐはなくなる。此の際に在ては、徒らにコンマやピリオド、又は其の他の形にばかり拘泥してゐてはいけない、先づ根本たる詩想をよく呑み込んで、然る後、詩形を崩さずに翻訳するやうにせねばならぬ。

ここで二葉亭が述べるような、言語間の構造の差異を無視した極端な原文尊重主義は、原理的には成功しないものである。そうした形式主義的な態度は読み難い翻訳をつくるという欠陥に二葉亭が気づいた後は、原文の根本のところを伝えるやり方を取ろうとした、と述べている。

こうして、「六号室」の日本語訳が発表された時期には、原文の形式を尊重する起点言語重視から、作家の詩想を伝えることを第一とする目標言語重視へと、翻訳の価値基準が転換していこうとしていた。なお、ここで目標言語重視への移行が述べているところの意味は、明治初期の大胆な〈翻案〉と同じ位相での目標言語重視ではない。あくまで、起点言語を重視した結果引き出される作者の詩想を、目標言語で明確に伝えられるようになるという意味である。つまり、目標言語重視から極端な起点言語重視に向かった後、目標言語重視の方向へとある種の揺り戻しがあったのではないか、そしてそれはかつての目標言語重視と同じものではなく、いわば螺旋(らせん)を描くようにしながら展開していったのではないかと稿者は考えている。

こうした翻訳文学をめぐる状況をふまえた上で、本稿では、瀬沼夏葉によるチェーホフ「六号室」の翻訳を取り上げ、文学空間における翻訳概念の移行期にあってどのような翻訳がなされたのかについて、〈境界〉という観点から考察する。その際、①馬場孤蝶による英語からの「重訳」を参照することにより、複数の言語間に見出される境界からどのような問題が生じるのか、②翻訳文の改変部に着目することにより、「六号室」の主題に関わる境界の設定にどのような変化が生じているのか、に分けて論じる。

なお、瀬沼夏葉については、秋山勇造や中村健之介・悦子、杉山秀子らによる優れた先行研究が挙げられる(注6)。それらは、主に、翻訳者・瀬沼夏葉について、人物伝として書かれたものの他、夏葉の翻訳業績の全体的な傾向や日本におけるロシア文学の翻訳史上の意義が論じられたものである。ただし、個々の翻訳作品について、表現分析の観点から論じられたものは管見の限り見られない。

以下、夏葉の数あるロシア文学作品の翻訳のうち、「六号室」に焦点をあて、その表現の分析などを通して、当時の翻訳の規範との関わりを考察する。この翻訳が発表された一九〇六年以降、翻訳の理念や実践について論じる翻訳論が活況を呈していく。そうした議論が準備される状況において、どのような翻訳がなされていたのか、その具体例をこの翻訳作品に見たい。

二、夏葉訳「六号室」出現の背景及び チェーホフ「六号室」について

瀬沼夏葉（一八七五―一九一五年）は、明治三十年代後半から四十年代にロシア文学、殊にチェーホフ文学を日本で最初に翻訳紹介した人物として知られる。

日本におけるロシア文学翻訳史は、一八八三（明治一六）年にプーシキン「大尉の娘」の抄訳である「露国奇聞花心蝶思録」（高須治助訳）をその嚆矢とする。以降、日露戦争開戦前までの間に、ゴーゴリ、レールモントフ、トルストーイ、ツルゲーネフ、ドストエーフスキイら近代作家の小説が、約三十作品翻訳されている。明治二十一年の二葉亭四迷訳「あひゞき」（ツルゲーネフ「猟人日記」）「めぐりあひ」（ツルゲーネフ「三つの邂逅」）を一つの分岐点として、ロシア文学作品の翻訳が活発化する。だが、そのうち、ロシア語からの直訳によるものは、二葉亭四迷と小西増太郎[注2]のみであり、それ以外は森鷗外や内田魯庵らによる英語やドイツ語からの重訳であった。

三十年代に入れば、徳富蘆花や田山花袋などの名も見えるが、二葉亭四迷を中心に、ロシア語からの直接訳が増加する。そうした中で、夏葉の翻訳が次々と世に出されるようになる。その文脈で見れば、日露戦争直後に発表された「六号室」の日本語訳は、数少ないロシア語からの直訳であること、また翻訳者が当時にあっては珍しく女性であることが、特色として考えられる。

また、瀬沼夏葉が初めての翻訳を発表したのは明治三十四年であるが、夏葉の手がけた翻訳数は翌三五年に四作品、日露戦争期に九作品、以降、明治四二年まで毎年七、八作品へと増加の一途を辿る。一方、馬場孤蝶は、明治二十八年より翻訳を開始し、その中心はフランス文学作品であった。だが、明治三十五年に、初めてゴーリキイ「秋の一夜」の翻訳を発表し、ロシア文学の翻訳に着手した。日露戦争後の明治三十九年以降、チェーホフやツルゲーネフ、ドストエーフスキイの小説まで手がけるようになるが、明治四十一年までの間、孤蝶の年間翻訳数の半数をロシア文学作品が占めるようになる。このことは、日露戦争を一つの契機として、ロシア文学への関心が高まっていたことを物語っていよう。

瀬沼夏葉は、明治期末から大正期初めにかけて、チェーホフの短編小説を翻訳している。「六号室」や戯曲「桜の園」は、夏葉による翻訳の中でも、中編に分類され、代表的なものと位置づけられる。

「六号室」は、チェーホフが三十歳（一八九〇年）の時に、サハリンで流刑地の実態調査のために滞在した一年余りを経て執筆されており、全十九章から成る。チェーホフ研究史上、ロシアにおいても日本においても、この旅行の前年に書かれた「退屈な話」と合わせて、従来からチェーホフの思索と作風の軌跡として重要視されてきた作品である。

主人公である医師ラーギンは、某郡の田舎町にある慈善病院に、二十年も勤めている。元々神学の道を断念して親の意向をくんでなった医者であったため、院長として赴任した当初こそ熱心に診察し病院を運営していたものの、変わらぬ現実と日常への倦怠から、まもなくすると、診察にも病院運営にも無関心を決め込み、読書にふける日々を過ごすようになる。ラーギンは、知性をもてあまし、哲学を語る相手もおらず、本当の人生を生きることができない閑職についてしまったことを憂えている。

そのような中、ふとしたきっかけで、ラーギンは「六号室」と呼ばれる隔離された精神病棟を訪れ、そこでグローモフという青年貴族の患者と出会う。話してみると、なかなか知性もあって、話も理にかなっている人物で、ラーギンは、初めて自分と語りあえる相手を見つけたような気がし、それから六号室に通い始めるのである。時のたつのも忘れて〈狂人〉と話し込むラーギンの様子に、周囲はラーギン発狂の疑念を募らせていく。そして、ある日、ラーギンは自分の部下である医者から同行を求められ、六号室に出向くとそのまま病室に閉じ込められる。

かつて、病棟から出すよう迫ってくるグローモフに対し、ラーギンは次のように述べていた。精神病棟の「内」と「外」とは変わりがなく、病棟の内部が不自由で劣悪な環境にあると思うのは皮相な考えにすぎない。本質的に世の中はどこも同じであり、社会の進歩も改良も意味をなさず、幸不幸は自分の内にあるのだ、と。そのことを思い起こし、快適な自室から六号室に押し込まれた自身を納得させようとするが、その試みは成功しない。

今や患者となったラーギンは「これは何かの誤解だ」と病室から出て行こうとするが、守衛のニキータに殴り倒される。そして、初めてここに収容されている患者の現実を知り、声の限りに叫び医者たちを殴りに行こうとするが声すら出ず、翌朝、卒中の発作によって死を迎える。

「六号室」の英訳本は、「チェーホフの英語世界での最初の翻訳本」にほかならず、日本でも「青年文学者の間にチェーホフの名が喧伝されるようになった」のはこの本の流通以来のことという。[注8] 馬場孤蝶は、英文学者にして、評論家、翻訳者として知られ、島崎藤村や戸川秋骨らと交流があった人物であるが、「六号室」翻訳の原典はこの英訳本であったと考えられる。[注9]

三、言語の境界に関わる問題

以下、具体例を挙げながら、いくつかの分析を行っていく。（引用資料は、本稿末尾の「本文引用文献」に記した通りである。）

（一）〈直訳〉と〈重訳〉という境界

「六号室」の患者グローモフに「なぜ自分はここに閉じ込められ

なければならないのか」と詰め寄られた医師ラーギンが、静かに返答する場面での会話の一節である。この箇所について、夏葉訳、孤蝶訳、そして現代語訳として松下裕訳を比較し、ロシア語原文と英語訳を対照させる。

【本文1―1】夏葉訳

「徳義上だとか、論理だとか、那様事は何もありません。唯場合［稿者注―直後に「偶然の場合」と言い換え］です。即ち此処に入れられた者は入ってゐるのであるし、入れられん者は自由に出歩いている、其れ丈けの事です。…（後略）…」

【本文1―2】孤蝶訳

「いや、これはね、特技だの、論理の問題ぢやあ無いね。全く境遇に因るんだ。此所へ入れられた者は、此所に止まつて居なきやあならんし、此所に入れられ無い者は、自由に生活する。唯それだけなんです。…（後略）…」

【本文1―3】松下訳（現代訳）

「道徳や理屈はこのばあい関係ありませんな。すべては偶然なんですよ。入れられた者はここにいる、入れられなかった者はうろついてる、それだけのことですよ。…（後略）…」

【本文1―4】ロシア語原文（該当箇所のみ）

Нравственное отношение и логика тут ни при чём. Всё зависит от случая.

【本文1―5】英語訳（該当箇所のみ）

“It is not a question of morality or logic. It depends on circumstances...”

ロシア語のслучая（出来事、偶然、場合）に注目して比較すれば、「場合」（夏葉訳）と「偶然」（松下訳）は近似している。だが、「境遇」（孤蝶訳）のみ、異なるニュアンスを有した語である。これは、ロングによる英語訳では、circumstances（境遇、状況）となっているため、〈重訳〉であることに起因する翻訳文の差異と見てよいだろう。「偶然」や「場合」次第で「六号室」に収容されるという偶発性と、置かれた「境遇」によって「此所へ入れられた者は、此所に止まつて居なきやあならん」という必然性との間には、自ずと意味合いにズレが生じる。このように、誤訳やそれに近い訳は、言語や文化の境界を浮き彫りにしてみせる。

だが、直訳であれば常に正確というわけでもないのが次に挙げる例である。

【本文2—1】夏葉訳

或る騎兵大隊長の夫人に変者(かはりもの)があつて、毎(いつ)でも身に士官の服を着けて、夜になると一人で、カフカズの山中を案内者もなく騎馬で行く。話に聞くと、何でも韃靼人(だつたんじん)の村に、其夫人と土地の某公爵との間に小説があつたとの事だ、とかと。

【本文2—2】孤蝶訳

大隊長の妻、何んと異常な女であつたらう、将校服を着て、夜、護衛無しで山のなかへ馬を進めるのであった。ある村の君主と風流な関係があるのだとの噂があった。

【本文2—3】松下訳

ある大隊長の細君(さいくん)などは変わった女で、将校服を着て、毎晩たった一人で案内人もつれずに騎馬で山へ入ってったものだ。噂(うわさ)では、彼女は部落で、土地の豪族と忍び逢いをしてたという。

【本文2—4】ロシア語原文

А жена одного батальнного командира, странная женщина, надевала офицерское платье и уезжала по вечерам в горы, одна без проводника. Говорят, что в аулах у неё был роман с каким-то князьком.

【本文2—5】英語訳

And the wife of the commander of his battalion – what a strange woman! – who put on an officer's uniform and drove into the mountains at night without an escort. They said she had a romance with a prince in one of the villages.

ロシア語のpomanと英語のromanceという語に着目して訳語を比較すれば、ロシア語の方には「小説」という語があてられ、英語のロマンスからは「風流な関係」という語が引き出されていることがわかる。これは、文脈から考えても、松下訳の「忍び逢い」、つまり〈逢引き〉とするのが妥当である。そのように見れば、ロシア語からの直訳の方が誤訳で、重訳のほうが適切というケースになろう。

だが、問題は、誤訳の有無という表層的なレベルでの議論に留まるものではない。より重要なのは、先に引用したBMの言にあるように、それでもなお、この時期、翻訳の価値基準として見た場合、原語からの直訳の方により信頼が置かれ、重訳の信頼性が低くなる傾向にあったという点である。

(二) 起点言語重視と目標言語重視という境界

では、夏葉訳「六号室」の翻訳文にはどのような特徴が見られるのかについて検討する。

たとえば、次のような箇所がある。

【本文3—1】夏葉訳「六号室」

晩になると倶楽部に行っては玉突をして遊ぶ、骨牌は余り好まぬ方。而して何時もお極りの文句を可く用ふ人間。

【本文3—2】孤蝶訳「六号室」

彼は、骨牌には少しも手を出さぬが、晩になると、倶楽部へ行って、球突で時を費すのである。

【本文3—3】松下訳「六号室」

クラブで毎晩玉突きをしたが、カルタは好きではなかった。会話に「暇つぶしさ」「ちんぷんかんぷんだ」「たくさんだよ」などという言葉を挿むのが好きだった。

以上の三つの日本語訳を比べれば、夏葉訳には他の翻訳文には見られない体言止めが確認される。この箇所は、ロシア語原文と英語訳では次の通りである。

【本文3—4】ロシア語原文

В клубе по вечером играет он в бильярд, карт же не любит. Большой охотник употреблять в разговоре такие слова, как канитель, мантифолия с уксусом, будет тебе тень наводить и т. п.

【本文3—5】英語訳

He did not care for cards, and in the evenings spent his time playing billiard at the club.

ロシア語原文を見る限り、文体上、体言止めを用いる必然性は見出せず、松下訳のように用言を使うのが〈原文に即した〉形式だと言えよう。なお、ここで、孤蝶訳は英語訳に〈忠実〉であるため、英語訳で欠落している「会話に「暇つぶしさ」「ちんぷんかんぷんだ」「たくさんだよ」などという言葉を挿むのが好きだった」という部分が訳出されていない。

こうした例以外にも、三つの日本語訳の本文を比較する時、夏葉訳は直訳であるにもかかわらず、ロシア語原文には見られない体言止めや大きな省略箇所が、重訳である孤蝶訳より多いことが認められる。そして、それが原文との相違が生じる要因となっているのである。その意味では、相対的に、目標言語（日本語）を重視した翻訳であると見なすことができよう。

では、ここで、夏葉による他のロシア文学作品の翻訳には、このよ

うな傾向が見られるかどうかに関して、「アンナカレーニナ」（トルストーイ原作）と「貧しき少女」（ドストエーフスキイ原作）といった、「六号室」以前に翻訳された作品を横断的に読むことで指摘したい。

【本文4―1】瀬沼夏葉・尾崎紅葉訳　トルストイ『アンナカレーニナ』（「文藪」、明治三十五年九月）[注10]

「玄関の方へ。それまでは此等を歩いてお在でしたが……あゝ、閣下、あの方で御座ります。」

と小使の指すのは、羊の毛皮の帽子を冠つて、軽い早足に磨滅した石段を昇つて来る、顎髭の縮れた肩幅の広い体格屈強の一紳士。

【本文4―2】紅葉・夏葉訳　トルストイ「アンナカレーニナ」（「文藪」、明治三十五年九月）

而して、モスクワに出て来ると、毎も逆上せ返つて、屑々してさも窮屈さうで、其が為に又神経が激して、物事に対して総て反対の見解を待つやうな次第。

【本文4―3】夏葉訳・ドストエフスキイ「貧しき少女」（「文芸倶楽部」、明治三十七年四月）

老人は真赤になつて、倉皇狼狽して、ぎく〳〵と吃り散らして、奈何にも、恁にもならぬ体。

明治三十五年発表の「アンナカレーニナ」には、たとえば「～様子。」「～立ち去つた跡。」「待つやうな次第。」「疎遠になつた始末。」など、体言止めが全三十七頁（レイアウトは一段組）の中に十一箇所ある。明治三十七年に発表された「貧しき少女」[注11]において、「心配さうな風。」など、体言止めが全三十四頁（レイアウトは一段組）の中に十三箇所ある。それが、明治三十九年の「六号室」になると、「といふやうな塩梅。」「すやはりそこに仁王立ち。」「といふやうな質。」「玄関の間で又も立ち聞き。」など、体言止めは全五十頁（レイアウトは二段組）の中に十九箇所ある。このように、明治三十九年の夏葉訳は、体言止めが減少しており、夏葉訳という時間軸で相対的に見れば、起点言語をやや重視した様子がうかがえる。

夏葉訳におけるもう一つの大きな特徴として、発表当時すでに孤蝶からも批判めいた指摘を受けていた大胆な省略が挙げられる。それは、たとえば、次の部分に明白に表れている。

【本文5―1】夏葉訳

其他遺伝論、催眠術、パステルや、コツホなどの発見、衛生学、統計学などは奈何であらう？…。」

「然し其れが奈何である。」

と、彼はパツと目を開いて自ら問ふた。

【本文5―2】孤蝶訳

で、催眠術、遺伝説、パスツウルや、コツホの発見、衛生学の統計は固より、露国の地方芸術でさへ驚くべき進境では無いか。精神病学、その病症分類、診断法、治療法などは、過去の方法に対して非常な革新では無いか。最早、瘋癲患者は、冷水に浸たされ、固い直衣で身体を締めつけらるゝことは無い、彼等は人間としての待遇を受けるやうになつた、まだその上に―アンドレエ、エフィミッチが、新聞紙で読むだ所では―特有の演劇を持ち、舞踏を持ちて居るとさへいふのである。…（中略）…

『が、結局は何うか』

と、アンドレエ、エフィミッチは、眼を開けて、自ら問うのである。

【本文5―3】松下訳

遺伝学説、催眠術、パスツールやコッホの発見、統計衛生学、それにわがロシアの地方医学はどうだろう。精神医学は、最新の疾病分類、診断、治療法を持ち、昔と比べれば月とすっぽんほどの違いがある。今では精神病者に頭から冷水を浴びせたり、拘禁衣を着せたりせずに、患者を人間らしく扱い、新聞によれば、彼らに芝居を見せたり、ダンス・パーティーを開いたりするということだ。…（中略）…

「だがそれがどうした」とアンドレイ・エフィームイチは自問しながら目を開ける。

松下訳の「精神医学は、最新の疾病分類、診断、治療法を持ち、昔と比べれば月とすっぽんほどの違いがある。今では精神病者に頭から冷水を浴びせたり、拘禁衣を着せたりせずに、患者を人間らしく扱い、新聞によれば、彼らに芝居を見せたり、ダンス・パーティーを開いたりするということだ。…（中略）…」の部分が、夏葉訳では全く省略されている。それに対し、孤蝶訳は、次の英語訳から〈忠実〉に翻訳しようとした形跡が見られ、それゆえ、夏葉訳よりもむしろロシア語原文に近い内容となっている。

【本文5―4】英語訳

And hyponotism, the theory of heredity, the discoveries of Pasteur and Koch, statistics of hygiene, even Russian Zemstvo medicine! Psychiatry, with its classification of diseases, its methods of diagnosis, its method of care – what a transformation of the methods of the past! No longer are lunatics drenched with cold water and confined in strait waistcoats; they are treated as human beings, and even – as Andréi Yéfimitch read in the newspapers – have their own special dramatic entertainments and dances……,

“but in the end?” asks Andréi Yéfimitch, opening his eyes.

夏葉訳全体を見渡せば、欠落箇所については、特に、ラーギンとグローモフの間で交わされる哲学的な議論や、ロシアの医療事情の説明の部分が、大幅に省略される傾向にある。

一方、孤蝶訳は、一文や一句のレベルでの省略に止まる。第三章から第一〇章までについて、夏葉訳と孤蝶訳、そしてロシア語原文を比較した場合、数量的には、孤蝶訳が一文・一句レベルでの省略が四箇所あるのに対し、夏葉訳は、一文・一句レベルでの省略は三箇所、二文以上の省略が五箇所見られる。夏葉訳の方が孤蝶訳に比して省略の多いことは明らかである。つまり、夏葉訳に省略が多いというのは、孤蝶の言葉通りだったといえる。

これ以外にも、夏葉訳は、原文にある改行を無視して段落をつないだり、複数の文を一つの文にまとめたりすることが少なくない。一文が十二、三行続くものも所々見られる。それに対して、孤蝶訳は、英語訳の本文をできるだけ〈忠実〉に翻訳しようとする傾向がうかがえる。たとえば、例外はあるものの、基本的には英語訳文のコンマの位置に日本語訳文の句点をおき、引用符は必ずカギカッコに改め、仮定法などの句の順序をできるだけ崩さないように、「何々だろう、何々ならば」という形をとるなどの工夫が見受けられる。また、段落のとり方も英語訳に準じており、そのため、ロシア語原文とは相違が生じている場合もある。体言止めもほぼ見られない。

このように見れば、「六号室」に関しては、目標言語（日本語）重視の夏葉訳と起点言語（英語）重視の孤蝶訳と考えることができよう。ただ、夏葉の翻訳史という時間軸でとらえれば、体言止めの減少が確認されることから、目標重視と起点重視の間で揺れ動く、翻訳の価値基準の一端が垣間見えるようである。

四、「六号室」の主題にかかわる境界の変容

（一）補足の例―境界線の引き直し

次に引用する部分は、ロシア語原文の同じ箇所を翻訳したものである。以下、三つの日本語訳の対照を通して、それぞれどのような事態が生じているのかについて検証する。

【本文6―1】夏葉訳

而して死が各人の正当な終であるとするなれば、何の為に人々の死の邪魔をするのか。仮にある商人とか、ある官吏とかゞ、五年十年余計に生延びたとして見た所で、其れが何になるか。若又医学の目的が薬を以て、苦痛を薄らげるものと為すならば、自然茲に一つの疑問が生じて来る。苦痛を薄らげるのは何の為か？…（中略）…プシセンは死に先つて非常に苦痛を感じ、不幸なるハイネは数年中風に罹つて臥してゐた。して見れば原始虫の如き我々に、切て苦難てふものが無かつたならば、全く含蓄の無い生活となつて了ふ。からして我々は病気するのは寧ろ当然ではないか。

【本文6―2】孤蝶訳

尚考へると『死』が果して、我々すべての正当な合法な終結であるならば、人の死ぬのを妨げて宜からうか、商人や、小役人が、もう五年、生きて居やうが、居まいが、何だ。我々は、医学の目的は、苦悩の緩和にあるとはいつて居るが、自から、次のやうな疑問を起さざるを得無い。何故に苦悩は緩和せねばならぬか。…（中略）…プシキンは死ぬる前に傷ましい苦悩を受け、ハイネは、麻痺の状態で数年臥て居たといふ。そんならば、唯アンドレエ、エフィミッチとか、マトレエナ、シヤヴィシンとかいふのみで、その生活は、無意味でせめて苦悩でも無くば、単細胞動物のそれのやうに空虚な徒輩の苦悩に、何で干渉すべきであらう。

【本文6―3】松下訳

それにそもそも、なんのために人の死んで行くのを妨げることがあるだろう、死というものが一人一人にとって正常な、当然行き着くべき終着点だとするならば。小商人や官吏なんどが、五年や十年生き延びたところで、いったいそれがなんになる。薬で人の苦痛をやわらげるのが医学の目的だとするならば、こういう疑問が否応なしに湧いてくる―いったいなんのために苦痛をやわらげるのか。…（中略）…プーシキンは臨終の際に恐ろしい苦しみを味わい、気の毒なハイネは中風で何年間も寝たきりだった。だとすれば、そこいらのアンドレイ・エフィームイチとかマトリョーナ・サーヴィシナとかが、どうしてしばらくのあいだ病床で苦しんではならないことがあるのか。彼等の生涯はもともと内容の乏しいものだったのに、もしも苦痛が与えられないとすれば、なおさら全く空虚で、アミーバの一生のようなものになってしまうだろう。

以上に引用した部分では、病気と死について考えるための単位が、「我々」、「人」「徒輩」「彼等」（人間一般）、「アンドレイ・エフィームイチ」や「マトリョーナ・サーヴィシナ」、「アメーバ」となっている。ここでは、集団や個人、人生における意義の有無を、語り手が病気や死について考えるための単位として列挙していくのである。

この箇所を、次に引用する原文及び英語訳で確認する。

【本文6―4】ロシア語原文（該当箇所のみ）

Да и к чему мешать людям умирать, если смерть есть нормальный и законный конец каждого?……

Почему же не пободеть какому-нибудь Андрéю Ёфимычу или Матрёне Савишине, жизнь которых бессодержательна и была бы совершенно пуста и похожа на жизнь амёбы, если бы не страдания?

【本文6―5】英語訳（該当箇所のみ）

And, indeed, why hinder people dying, if death is the normal and lawful end of us all?... ...

Why, then, interfere with the sufferings of some mere Andréi Yéfimitch or Matrena Savishin, whose lives are meaningless, and would be as vacuous as the life of the ameba if it were not for suffering?

この部分について、複数のテクストの比較によってわかることは、境界の設定に変化が生じているという点である。つまり、夏葉訳以外の翻訳では、ロシア語原文通り、「我々」が置かれているのはあくまでラーギンの側であって、病人は「彼等」（アメーバ）の側に含まれるようにしながら、「我々」と「病人」との間に境界線が引かれており、死と病気について、いわば傍観者的に述べられている。一方、夏葉訳のみ、「我々」を「アメーバ」的存在ととらえ、空虚な生活を送る人間全般の中に包摂している。このように、原文にあるような構図を成立させる境界線とは別の境界線が引かれることで、各々のカテゴリーの構成要素も違ったものとなる。

これにより、夏葉訳では、病気は誰にでも起こりうるものであり、日常生活の延長線上にあるという前提が新たに作り出されている。それが原文とは微妙に重なり微妙にずらされていくような新たな世界を生み出すのである。夏葉訳の読者の間には、おそらくそうした世界として「六号室」を構築する想像力が働いたのではないかと考えられる。

（二）欠落の例―新たな境界の浮上[注12]

ところで、「六号室」のあらすじは、現代語訳においても夏葉訳においてもおおよそ共有されている。だが、先述したように、翻訳文を詳細に見ていけば、夏葉訳にはいくつかの欠落部分が確認できる。その中でも、重要な箇所の一つは、「三」における、青年グローモフが〈発狂〉したとされる経過の一部を物語る〈告白〉の場面に見出せよう。ここは、この小説の「核心となる最重要の思想」[注13]と指摘されたり、「本来省略を許されない重要な箇所」[注14]の一例として挙げられたりしているが、現代語訳では、次のように翻訳されている。

【本文7―1】松下訳

今日（こんにち）の裁判のもとでは誤審は大いにありうるし、またあったところで不思議でもなんでもない。他人の苦痛に職務上、実務上のかかわりを持つ人びと、たとえば、裁判官、警察官、医師などは、時のたつにしたがって、慣れっこになり、たとえそうしまいと思っていても、相手に形式的な態度しか取れないようになってしまう。その点こういう人びとは、裏庭で羊や子牛をほ

ふって、血をなんとも思わない百姓たちとなんら選ぶところはない。個人にたいして形式的な、酷薄な態度を取り始めたが最後、罪もない人からいっさいの財産権を取り上げて懲役刑に処するのに、裁判官に必要なのはただ一つ—時だけだ。それがために裁判官に俸給が支払われている一定の形式を踏むのに必要な時だけだ。そうしてそれが過ぎてしまえば、一件落着となってしまう。そのあとで、こんな小さな、汚い、鉄道から二百キロもあるような町で、いくら公正や弁論を求めたところで、それがいったいなんになる！しかも、あらゆる暴力が、賢明かつ目的に適った必要悪として社会に迎えられ、あらゆる寛大な行為、たとえば無罪の判決が、不満、復讐の感情の全的な爆発を呼び起こすような現状のもとでは、公正をうんぬんすること自体こっけいなことではないか。

【本文6—2】ロシア語原文（該当箇所のみ）

При формальномже, бездушном отношении к личности, для того, чтобы невинного человека лишить всех прав состояния и присудить к каторге, судье нужно только одно: время. Только время на соблюдение кое-каких формальностей, за которые судье платят жалованье, а затем—всё кончено.

以上の各本文の傍線部が、夏葉訳では全く訳出されていない。ここで省略された「時」については、ロシア語原文においても время（時間）で記されており、только（だけ）と共に用いられ、まさに〈時間だけが〉と強調されている箇所である。

また、原文以外、孤蝶訳もその原典となった英訳も、「時」（時間）が欠落している。そのことは、次の引用で確認できる。

【本文6—3】孤蝶訳

何処にも行はれぬことの無い個人に対する精神無き関係から見て、裁判官の眼中には、唯、或る手続の遂行あるのみ、まづ万事其れッ切りで、やゝもすれば、無辜の人が、公権を剥奪され、或は、苦役に投ぜらるゝことがある。で、一番近い鉄道といふのでさへ二百ヴェルスタも距たつて居る、この汚い眠むつたやうな小さい町で、誰が、公正を得、仲介の途を得るのを望み得られよう。社会は如何なる形の強制をも、合理とし、便宜と視、必要と認めている場合に、犯罪嫌疑者の放免のごとき、普通寛恕の行為でさへも、町民が復権の念を満足せしめ得無かつた怨の爆発を喚起するのが常である場合に、公正を期待などは全く愚の極、寧ろ笑ふべきことでは無いか。

【本文6―4】英語訳（該当箇所のみ）

In view of the soulless relationship to human personality which everywhere obtains, all that a judge thinks of is the observance of certain formalities, and then all is over, and an innocent man perhaps deprived of his civil rights or sent to the galleys.

この「時」が訳出されないことによって、個人に対する権力の暴力性のみ指摘され、権力の行使をめぐる本質的な問題と関わるはずの〈時間〉が不在となるのである。裁判所も精神病棟も、裁判所の場合は現実の位相で、精神病棟の場合は隠喩の位相で、ともに「監獄」を接点として連結される場である。よって、先に引用した部分を、ロシアの裁判所ないし裁判制度から精神病棟へと置き換えてみれば、裁判で流れる「時」は、〈六号室〉においても同様に経過される、ないし経過されるべき時間として存在することがわかる。〈狂人〉だと周囲から認定された人が病院に連れて来られ、精神科医によって〈患者〉と診断されれば、精神病棟〈六号室〉に収容され拘束され、退院はほぼ絶望的なまま、〈終わり〉の時に向かってただ形式的な投薬と診断が繰り返され時間が消化されていく。要するに、ここでは、〈狂人〉か否かの医学的な〈証明〉のためでなく、「一定の形式を踏むのに必要な」だけ、時間が〈引き延ばされる〉のである。

こうした〈形式〉と〈時間〉の組み合わせによってこそ、〈六号室〉と裁判制度が連結され、双方に内在する権力構造を明るみに出し、そうした権力構造をのみ込んでいるロシア社会、それを「監獄」と見立てて批判することが可能になる―そうした回路が、夏葉訳からも孤蝶訳からも消えている。そして、ロシア語から翻訳した夏葉は故意に省略し、孤蝶は英語訳からの〈重訳〉ゆえに結果的に見落とした跡がうかがえる。

この「時」の欠落によって、「六号室」は外界との接続が絶たれ、代わりに外界との間に立ちはだかる〈壁〉のような境界が浮上する。〈壁〉は、内界と外界を隔てる。その時、「六号室」内の出来事は、外界から孤絶された世界で繰り広げられる特殊な物語となる。つまり、夏葉訳でも孤蝶訳でも、「六号室」はあくまで「六号室」であって、「六号室」的なものへと抽象化しえない存在へと変化するのである。

五、まとめ

相馬御風は、「最近の創作壇」（「新潮」、明治四十二年九月）と題する文章に、「是れ［稿者注―小川未明『悶死』］も一種の精神病者を中から描いたもので、些つとチェホフの『六号室』の中にある或る狂人と、そして其の描き方とを連想させる作だ」と記している。「六号室」の翻訳は、それ以降の日本文学において、〈精神病院〉に収容された〈狂人〉という、一つの文学的モチーフを確立する要素となった可能性がある。

ただ、こうしたモチーフの問題だけではなく、「知識ある人が現実に接触して心気沮喪する光景が物凄く顕はれている」という島崎藤村の感想（「早稲田文学」、明治四十一年十二月）にあるように、実際には、解釈の中心は、医師ラーギン及び狂人グローモフの心の動きであり、「現実」に接した結果として〈狂人〉に変貌する物語として解釈する流れも見受けられる。そこでは、「知識ある人」個人の物語が前景化し、社会批判性は影の薄いものとなる。

以上、瀬沼夏葉訳「六号室」について、〈境界〉という観点から検討してきた。原文の事実性と、解釈や翻訳の規範性とが二重写しになる世界の中で、夏葉訳「六号室」は、二つの言語の間に横たわる境界線の存在を指し示す。それと同時に、主題に関わる単位を結びつけたり切り離したりするようにして、原文で設定されていたトピック領域の境界線も引き直す。また、補足的に書くことで境界線が消滅したり、書かないことでかえって境界線が浮上したりするという現象が見受けられる。そうした境界線が絡み合うような、ロシア語と日本語との境界地帯、そしてロシア文学と日本文学との境界地帯に現出したのが、夏葉訳「六号室」だったと考えられる。

夏葉訳「六号室」のテクストには、明治二十年代から三十年代において、文学の翻訳について議論された問題が多く含まれている。この「六号室」は、後に大正二年三月に発表された「桜の園」（「青鞜」に掲載、四月に新潮社より単行本化）と並び、瀬沼夏葉の翻訳文学の代表作であるとの評価を得ている。「六号室」に関して、起点言語をより重視した〈重訳〉の孤蝶訳ではなく、目標言語をより尊重した〈直訳〉である夏葉訳―少しねじれた表現になるが―に高い評価が与えられたことは、当時の日本における文学の翻訳をめぐる価値規範、つまり〈文学の翻訳とはどうあるべきか〉という翻訳概念の基準の一つのありようを物語っていよう。

注

（注1）「文芸界」誌面には「夏葉女史訳」と記されているが、本稿では瀬沼夏葉訳とする。

（注2）なお、「芸苑」巻第一号が「六号室」一～二、つづいて巻第二号が三～五、巻第三号が六～七、巻第四号が九～十、巻第五号が十一～十四、巻第六号が十五～十九の各章を掲載している。

（注3）ただ、稿者が日本近代文学館所蔵の「芸苑」を確認する限りでは、孤蝶訳は八章が欠落しており、次号は九章から始まっている。英訳に八章はあるため、孤蝶が数字を見落としたとは考えづらく、また本号の頁数を見ても落丁の跡は認められない。印刷上の誤りである可能性も捨てられない。

（注4）佐藤孝「明治期文学の文章―原文一致体の発生を中心として」（『近代語研究』第二集、武蔵野書院、昭和四十三年）参照。

（注5）水野的「本アンソロジーを読むために」（柳父章ほか編『日本の翻訳論』、法政大学出版局、平成二十二年）参照。

（注6）秋山勇造「瀬沼夏葉―生涯と業績―」（「神奈川大学人文研究」一三二、

平成八年）中村健之介・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』（教文館、平成十五年）、杉山秀子「瀬沼夏葉とロシア文学」（『瀬沼夏葉全集』下巻、京王書林、平成十七年）、同「瀬沼夏葉論」（『明治女性文学論』、翰林書房、平成十九年）渡邊澄子「瀬沼夏葉の文学世界」（『瀬沼夏葉全集』前掲）など。

（注7）「名曲クレーツエロワ」（トルストーイ「クロイツェル・ソナタ」）は、尾崎紅葉と共訳の体裁をとっている。

（注8）佐藤清郎『チェーホフ芸術の世界』（筑摩書房、昭和五十五年）参照。

（注9）佐々木英昭「精神病者をどう描くか」（坂元昌樹他編『越境する漱石文学』、思文閣出版、平成二十三年）によれば、夏目漱石も所有しており、この本に収録されている十二篇の作品のうち、三篇に次の書き込みの跡が見られるという。「「黒衣の僧」第三流ノ作ナリ。「ねむい」此所迄書けばモーパサンニナツテ仕舞フ。不賛成なり。「六号室」black monk ナドトハ比較ニナラヌ名作ナリ」。

（注10）原典には「夏葉女史　紅葉山人　訳」と記載され、共訳の体裁をとっている。

（注11）これは、ドストエーフスキイ『貧しき人々』における少女の覚書のみを部分訳したものである。その旨、冒頭箇所で、夏葉も断り書きを付している。

（注12）本節の論については、拙論「消された〈時〉―チェーホフ『六号室』の二つの日本語訳をめぐって」（『敍説』Ⅲ―〇七、平成二十三年九月）参照。なお、この拙論では、孤蝶訳と英語訳についてはほぼ触れていない。

（注13）松下裕「解説」（『六号病棟・退屈な話　他五篇』、岩波文庫、平成二十一年）二七六―二七七頁。

（注14）旭季彦『チェーホフ　日本のあしおと』（新興出版社、昭和五十四年）二十八頁。

本文引用文献

・瀬沼夏葉訳『六号室』（「文芸界」、明治三十九年四月）
・尾崎紅葉・瀬沼夏葉訳『アンナカレーニナ』（文藪、明治三十五年九月）
・瀬沼夏葉訳『貧しき少女』（「文芸倶楽部」、明治三十七年四月）
・馬場孤蝶訳『六号室』（「芸苑」、明治三十九年一月～四月）
・松下裕訳『六号病棟・退屈な話　他五篇』（平成二十一年、岩波書店）
・Чехов, А. П., *Палата No. 6*,《*Сочинения пом восьмой 1892-1894*》, Москва: Наука, 1977. 一八九四年初版の本文を収録。
・Tchekhoff, *Anton, Ward No. 6*, *"The Black Monk and Other Stories"*, translated from the Russian by R. E. C. Long, London: Duckworth&Co., 1903.

なお、本文及び資料の引用にあたり、旧字体は新字体に改めた。引用元に付されたルビは原則として省略した。また、傍線はすべて稿者によるものである。

付記

本稿は、広島大学国語国文学会平成二十四年度研究集会（平成二十四年七月八日）において、特別研究発表として口頭報告した内容に、若干の修正を加えたものである。会場で貴重なご意見をくださった方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げたい。

―みぞぶち・そのこ、広島大学大学院文学研究科准教授―